

第 70 回国際理解・国際協力のための高校生的主張コンクール
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟会長賞

「次期国連総会において、あなたが一般討論演説を発表するとしたら。」

- グローバル化への社会参画 -

兵庫県 芦屋学園高等学校 2 年 田 哲^{でん てつ}

僕は一つ疑問を抱いている。この疑問は国際社会における海外からの移民の生活に関わる重大な問題だ。この現代社会にて、世界の教育機関は多言語の授業、多様性の価値観を学ぶための交換留学などを実施し、さらには年々国境をまたいで観光、移住する者まで増えている。

各自の知らない文化など多様性に満ち溢れたこの社会でなぜ各国に住む外国人の声は政治に反映されにくいのだろうか。それが僕の疑問だ。

父親が中国人、母親が韓国人の家庭で生まれた僕は幼少期に日本へ移住した。日本の初等教育を受け育った僕は国籍の違いを感じさせないほど周囲に馴染み、支えられながら成長してきた、だからこそ僕のアイデンティティーはいつも日中韓の人間である。

しかし、公民の授業中に自身のアイデンティティーに相反することを知ってしまった。それは、外国人には参政権は認められていないということだ。その内容は僕に衝撃を与えた。一方でグローバル化社会に政治がどう対応しているのかに興味を持つきっかけにもなった。

その日早速諸外国の参政権について調べた。その時の僕はシンガポールに関心が向いた。自分が訪れたことがあり、世界で最も繁栄している多国籍国家の一つだからだ。

だが、結果は日本と同様に、その国の国籍を持たない限り参政権は認められていなかった。そして、地方レベルの投票権を国籍問わず国内全域で付与している国家の数は 30 カ国に満たない。国連は長年人権擁護の活動に取り組んできたが外国人参政権の問題においては各国の規律が尊重されてきた。されども国境を渡る者は珍しくない今こそ国連はその国々と共に内政における人権問題を見直すべきだ。僕はそう確信した。

そう思った僕の脳裏に蘇ったのは、シンガポールの旅路で出会った一人のマレーシア出身の男性の言葉だ。「シンガポールに住んでいて良いことと悪い事は何ですか？」そんな僕の問いに彼はこう答えた。「僕はこの国の生活に憧れてきたんだ！言語や人種に多様性があるってほんと居心地がいいよ！だけど、僕と友人たちは国籍が違うから政治には参加できない。ただ僕たちは第二の母国をより良くしたいだけなのに。もどかしいよ。」

疎外されているのは彼らだけではない、道端で見た汗水をたらしながら働く人々、リュックを背負い学校へ向かう少年少女たち、そして食堂のテーブルを囲み、人種を超えて談笑しあう人々。彼らに住んでいる国の国籍がないというだけで、自分たちの社会をよりよ

くするための機会をあたえられないままでいいのだろうか？外国人は政治において取り残されたままで良いのだろうか？

一方で、移民の参政権への反論として、その国々にとって不利益な政策が通る可能性や外国人増加による治安悪化の懸念などがある。僕はそのことについては否定しない。外国人に対する政策を誤った場合自国のみならず国際関係までに影響を及ぼし、その上、緊縛した社会情勢により移民にたいして慣用的ではない国も存在するからだ。

だが僕は主張したい。同じ空の下で、同じように学び、同じように働く我々外国人はその国のメンバーの一員に他ならない。グローバル化は各国に恩恵をもたらす反面、国同士の衝突が起きるリスクを秘めている。それでも、僕たちは自分の愛する第二の故郷でよりよい生活、幸福を追求する権利はあるはずだ。世界中どこであっても、自分で決意し根を下ろした以上、その場所は僕たちにとってかけがえのないふるさとになる。

そしてあなたたちにも考えて欲しい。ものや人が行き交うだけの表面的なグローバル化のまま満足して良いのだろうか？幸せな生活を求めて海を渡ってきたものの権利に制限があって良いのだろうか？

今僕たちが目指すべきものはすぐそこにある。国を跨いだ大きなグローバル化だけではない。それは国籍関係なく愛国心を政治で反映できる社会、国内のグローバル化だ。

だから僕たちの声を聞いて欲しい。いつだってこの国を思いやる気持ちは皆と変わらない。そして同じ食卓で、学び舎で、政治的フィールドで共に苦楽を分かち合いたい。僕たちは愛する国のために力になれる。